

# 世界川物語

>>3<<

## ドナウ川(セルビア)

ゆったりとしたサバ川の流れを受け入れ、ドナウ川はさらに水量を増してかたまたまで続く。ローマ帝国の時代から川の合流点を見下ろす丘の上に建つベオグラード要塞から見下ろすと、ここに暮らす人々と川の大切な関わりが見えてくる。

ドイツに源を発し、黒海に注ぐ欧州第2の川ドナウ。かつてここを往来した貨物船は観光クルーズ船に、川沿いの倉庫は現代的なカフェやレストランに姿を変えた。しかし、ドナウ川は今もセルビアの人々の暮らしの周辺にある。

### 3カ月の空爆

カップルや家族が夜遅くまで語り合う川べりのレストランの売り物の一つは新鮮な魚料理。食卓に供する



直前に地元の川漁師らが近くの川で取ってきたものだ。「川の恵みは市民になくてはならないものだ。その川の水やここにすむ生き物に目に見えない汚染が広がっているかもしれない。でも、誰もそれを分かっていない」。化学が専門のベオグラード大准教授、ウラジミール・ベスコスキー(37)が、流れを見詰めながらつぶ

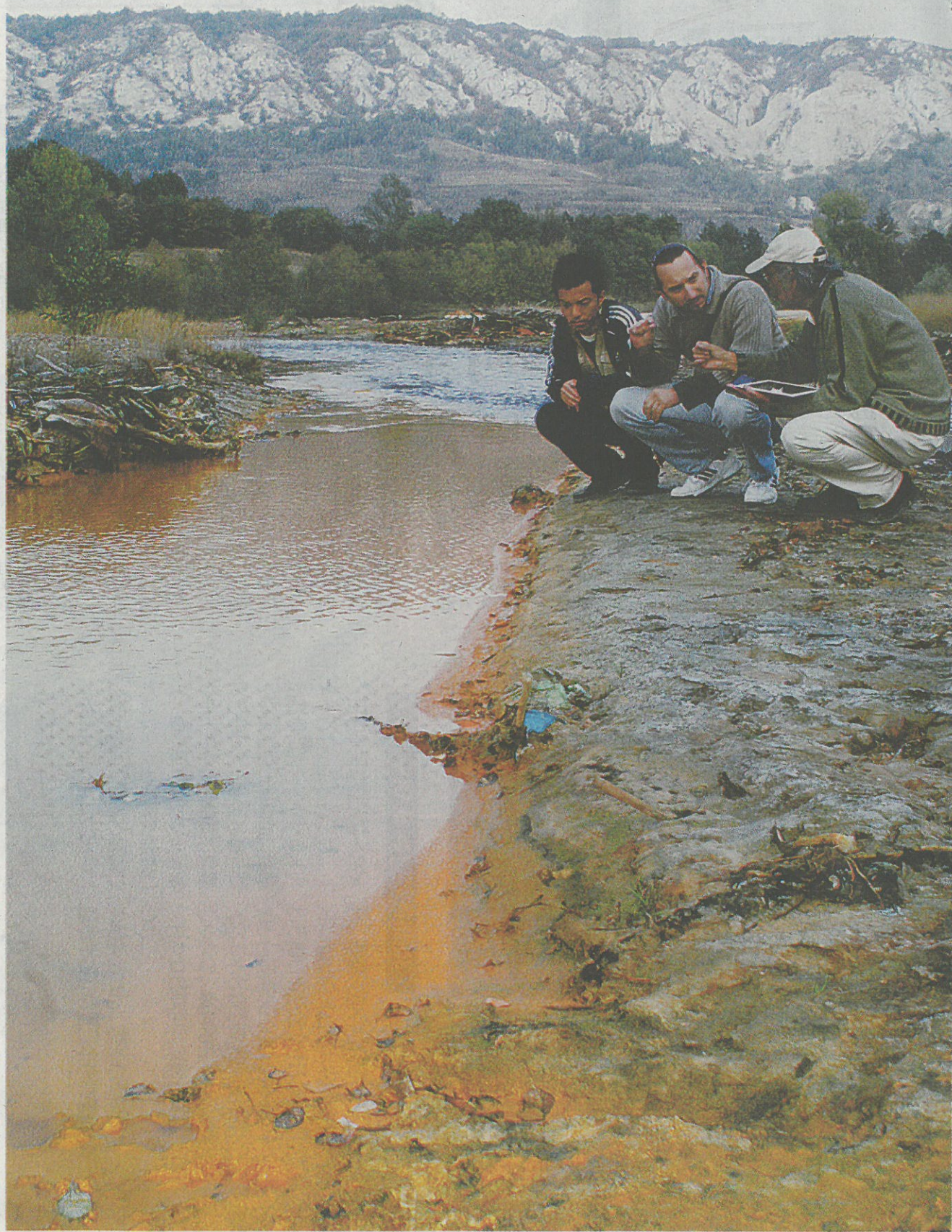
やく。「ベオグラードで生まれ、幼いころから川で生き物を追って遊んだ。今とは比べものにならないほどきれいで、たくさん生き物がいた」と言うベスコスキーは、1999年のあの日のことを今も鮮明に覚えている。3月24日、遠くから響く飛行機の音、さく裂する爆弾の音と衝撃。立ち上る黒煙。ベスコスキー

### ホットスポット

空爆直後、国連は化学物質汚染を確認するため、調査チームを派遣する。汚染の深刻さゆえに「ホットスポット」と称された場所の多くはドナウ川に面していた。高濃度PCBを含む変

は大学近くのアパートの一室で、おのきながら見詰めていた。爆撃された製油所は何日にもわたって燃え続け、黒煙が空を埋めた。民族対立に端を発したコソボ紛争で北大西洋条約機構(NATO)はユーゴスラビアを空爆、セルビアの工場や発電所、石油精製施設などは徹底的に破壊された。約3カ月続いた爆撃の後、ドナウには「有毒の遺産」と呼ばれる、目に見えない汚染が残された。発電所や工場からはポリ塩化ビフェニール(PCB)などの有害化学物質が大量に川に流れ込んだのだ。

圧器などは撤去、処理された。しかし、工場廃水などに含まれる有害物質、蓄積していることを突き止めた。しかしサンプルが少



セルビア・ボル銅鉱山の近くの川。流れ込んだ汚水の影響で水も川辺の土も黄色く染まっていた。(左から)竹峰、ベスコスキー、中野の3人が川辺に腰を下ろし、今後の研究計画などを話し合い始めた(共同)

# 見えない汚染との戦い